

2025/6/29 「はじけたね、ひろがったね」 使徒 7:59-60 こども 123、せ 687

こどもの日・花の日礼拝を迎えました。こどもたちと、保護者の方たちと、ご一緒に礼拝を捧げることのできる恵みに感謝いたします。

たねの話し

「たね いっぱい わらったね」(著・近藤薫美子)という絵本が我が家にあります。画面いっぱいに「はじけたね!」という1ページから、雑草たちの悲喜交々の様子が、元氣いっぱい広がっています。「とばされたね」「ながされたね」「たべられたね」「かくされたね」とそれぞれの種の運ばれる様子が描かれ、やがて、「眠ったね」という冬の場面に。そして、「めざめたね」「ゆれたね」「あえたね」と早春のページになり、最後は「わらったね!」と花畑の場面で、終わります。

この絵本は、いのちのあり方を教えてくれていると思いました。花開く瞬間を、人は最高の場面だと思いますが、実は、枯れる場面も、流される場面も、それどころか、食べられたり、隠されたりする場面さえ、そこには命が広がっていく、深い意味が込められた時間だということがわかるからです。そして最後のページは、最初のページの始まりとなり、いのちは巡っていきます。

たねを、人の命に重ねるなら、どんな実を結んでいるかが、本当に大切なことであると気づかされるでしょう。はじけなかったこと、飛ばされたり、流されたりしなかったこと、隠されたり、食べられなかったこと。一時的には、良かったね、と思うことも、それが、実を結ぶかどうかという視点から考えると、また違ってきますね。

ステファノの命

初代教会のステファノは、最初の殉教者です。イエス様のために死んだクリスチャンでした。彼が、イエス様のように「彼らをおゆるしてください」と言って世を去ったという証しが、散らされていった場所で、福音の種となりました。この教会に受け継がれている、竹入先生の殉教の歴史も、信仰は復興する(リバイバルは起こる)、そして戦争は決してしてはいけない、ということを私たちに教えています。

ステファノは「自分が死ねば、福音が広がる」と目論んで、命を差し出した訳ではなかったでしょう。この教会の殉教者である竹入高先生も、そうだと思います。ただただ、神様から与えられた命を、聖書が教えるように生きた結果でした。

私たちも、信仰を持って歩んでいても、時に浮き沈みがあります。飲み込まれる時もあります。心が弾けてしまうことも、ショックに吹き飛ばされてしまうこともあります。けれども、それでも、神様が私たちを愛してくださっているという福音を、しっかり伝えていきましょう。やがて私たちが眠りについた後、命の種は、新しい根を伸ばし、思いもよらない場所に、たくさんの喜びと笑顔の花を咲かせるからです。